

シムノンとダールの対立（続き）

"Les Polarophiles Tranquilles"（『物静かな推理小説ファン』）は、会報第1号として、演劇におけるシムノンに関する記事を、『シムノンとダールの対立』という副題で、発行しました。

シムノンの作品3作が舞台化されました。1作目は、"Quartier Nègre"（『黒人街』）で、シムノン本人が脚色し、1936年にブリュッセルで上演されました。結果は彼の期待に添えず、観客と批評家の判断を待たずに、シムノンは上演を打ち切りました。そして、小説家は舞台の脚色を一時的に断念したのです。

1950年に、彼は再挑戦することを了承します。文学界での名声を得たがっていた若い天才作家、フレデリック・ダールが、シムノンに彼自身の小説、"La Neige était sale"（『雪は汚れていた』）の脚色を提案するのです。

シムノンはこの企画とコラボレーションを受け入れますが、脚本に手を加え、ダールの貢献を最小限に抑え、作品監修をします。

しかし、ダールも黙ってはいません。ポスターに、彼の名前とシムノンの名前を並べて掲載させます。『雪は汚れていた』は舞台で大成功を収めます。125回の公演は、大きな反響を呼びます。

1952年に、彼に敬意を表するために開かれたレセプションで、シムノンはダールにとって衝撃的な一言を発してしまいます：「僕に脚色家はいない！」

深く傷ついたダールは、まるでシムノンが借りを返していないかのように、数回に渡り、記者や伝記作者にこのトラブルについて語ります。その続きは沈黙の中で行われますが、それは恐ろしい沈黙、復讐の沈黙なのです。

2年後、若い無名俳優、フレデリック・ヴァルマンが、メグレシリーズの1作、"Liberty-Bar"（『自由酒場』）の脚本をシムノンに送ります。シムノンは提案された仕事に魅了され、新たに挑戦することを受け入れます。舞台はシャルル・ドゥ・ロシュフォール劇場で上演されます。500回以上上演され、舞台は成功しますが、期待していたほどの反響はありませんでした。

その後は・・・沈黙です！上記の舞台の成功に関しても、フレデリック・ヴァルマンの息をのむ出世に関しても、沈黙が続きます。何が起こったのでしょうか？

2003年3月に発行した会報第1号の中で、シムノンとダールの対立に関する1回目のアプローチを試みました。1952年3月19日に起こったシムノンとダールの間のトラブルを詳述しました。フレデリック・ダールは、インタビューでこの出来事に関し繰り返し触れますが、詳しくは語りません。

他の異常点に気付き、フレデリック・ヴァルマンはフレデリック・ダールの仮名だという結論に至りました。これに関してはすでに詳しく述べたので、ここでは触れません。

捜査を始めた当初から、ヴァルマンが文学界に突然登場した理由は、彼の舞台用の脚色にあると予感していました。

2000年、フレデリック・ダールの死後、フレデリック・ヴァルマンが担った役を記載した、この偉大な作家に敬意を讃える記事を、露店の古本屋で配布しました（ウェブサイト polarophile.free.frにて講読可能）。事前に、フルーヴ・ノワール出版にフレデリック・ヴァルマンに関する情報を求めたところ、彼は亡くなったと信じ込まされました・・・

この記事がささやかに配布された後、「ヴァルマンは亡くなった」と語っていた人物が、生き返った彼の連絡先を渡すために、私に連絡をしてくるのです！

ヴァルマンに電話したところ、彼は、私の定義が根拠の無いものだと説得しようとしませんが、うまく行きません。シムノンと交わした文通書簡のコピーを欲しいと頼みましたが、断られました。

私は、圧力を受けたり、訴訟を起こすと脅迫されたりしましたが、屈服しませんでした。

その後、新しい要素が、この謎を明らかにするのです。

私がヴァルマンの名について波紋を起こしたため、彼の取り巻きは、彼の文学界での名声を固めようとするのです。まず、2001年1月に、文学紙『813』の第75号に、"Frédéric Valmain, un écrivain populaire"（『フレデリック・ヴァルマン、大衆作家』）という記事を、最後の作品、"Une sacrée fripouille"（『とんでもない悪党』）を削除したバイオグラフィーと共に発表します。興味深いことに、この作品は、彼がジェームス・カーターの名で作品を発表していたフルーヴ・ノワール出版のポリス・スペシャルシリーズの中で、唯一フレデリック・ヴァルマンの名で発表した作品で、彼が小説家としての活動を停止する前の最後の作品です。また、2002年には、私に拒否したシムノンとの文通書簡を、ジョルジュ・シムノン友の会に送るのです。

この文通書簡は、"Les Polarophiles Tranquilles"（『物静かな推理小説ファン』）会報第1号、『シムノンとダールの対立』が発表される数ヶ月前に、"Cahiers Simenon"（『シムノン誌』）第16号、"Les feux de la rampe"（『脚光』）に、全文公表されます。（私は、後にこの存在を知ることになります。）

ジョルジュ・シムノン友の会は、彼らの秘書の手紙を通して、以下のように連絡してきます：「私たちの会報第16号の存在をご存じなかったとは、残念です。

（・・・）ご存知だったら、あなたは間違いをおこすことなく、特にダールとヴァルマンを同人とみなすことは無かったでしょうに。フレデリック・ヴァルマンは存在します。私は彼に会ったのですから！『自由酒場』に関する、彼とシムノンの文通書簡の原本にも目を通しました。」

この会報第16号を手に入れ、読みましたが、私の主張に反覆する要素はありませんでした。私にとって、ダールは『自由酒場』の脚色作家です。シムノンを騙すために、ヴァルマンの名を利用したのです。

シムノン友の会の秘書に会い、ヴァルマンとの出会いに関し詳細を聞くため、ブリュッセルに行きました。

シムノン友の会の秘書と話弾み、幾つか異常点があることが明らかになりました：

– ヴァルマンの死後彼の家を訪れた秘書は、彼のアーカイブの中に、原稿が一枚も無いことを確認しました。

– リエージュ大学に保管されているシムノンのアーカイブの中にも、そこにあるはずの『自由酒場』の戯曲の原稿とヴァルマンとの文通書簡がありません。（リエージュ大学のブノワ・ドゥニ教授が立証してくださいました。）

当時、奥さんのドゥニーズ・シムノンがシムノンの秘書を務めていました：全書類が丁寧に目録に登録され、整理されていたにも関わらず、ヴァルマンとの文通書簡が紛失したということは、シムノンが意図的にこの件を覆い隠そうとしたことを示しているようです。

ジョルジュ・シムノン友の会が発行した文通書簡を研究するしかありませんでした。この分析は長く、専門家でない読者を退屈させる恐れがあるので、直ぐにヴァルマンが提供した最後の2通の手紙を読んでみましょう。

「1955年10月29日 親愛なるヴァルマン君へ

情報ありがとうございます。よくやったね。僕は仕事の真最中なので、電報のような文で返答します。

• 他のメグレとは全く違って、脚色し易いのは、"Maigret se trompe"（『メグレ間違え』）。

• もう一作、2番目に挙げるのは、"Maigret a peur"（『メグレの途中下車』）。
（両作品ともプレス・ドゥ・ラ・シテから出版）

舞台の脚本が出版されるのを待ち、海外にコピーを送ります。そのほうが簡単です。『雪は汚れていた』の場合と同様、協約上、海外の権利を僕が確保していた理由は、海外では僕の名声のお陰で作品が翻訳され、また通常、舞台の脚本ではなく、小説が翻案されるからです。しかし、舞台の脚本が翻訳されるのなら、僕が個人的に交渉し、25%の印税を君に渡そうと思います。いかがですか？君の取り分、77500フランの小切手を此処に送らせても構いません。皆さんに宜しくお伝え下さい。

ジョルジュ・シムノン

海外からの依頼を僕に送る際に、"Paris - Théâtre"（『パリ-テートル』）を何部か送ってください。彼らに返事をする際に、直接送ります。

ジョルジュ・シムノン

住所：Golden Gate, Av. de la Reine Elisabeth, Cannes, Alpes-Maritimes」

「11月10日、カンヌにて

親愛なるヴァルマン君、

君はどうも誤解しているようです。

第10項目が示しているのは、海外での僕の印税、すなわちフランス人作家に割り当てられる分の25%です。海外の翻案家は、単純に翻訳するのではなく、翻案するため、印税の50%を受取るのです。

海外での印税の割当は以下になります：

翻案家 50%

フランス人作家（原作者）50%

この50%から君に割り当てるため、50%の25%

友情を込めて。

ジョルジュ・シムノン

第11項目の変更も参照。

ジョルジュ・シムノン

住所：Golden Gate, Av. de la Reine Elisabeth, Cannes, Alpes-Maritimes

電話：901-76」（手書きの手紙）

この2通の手紙が雄弁に物語っています。この謎に関する鍵を握っているのです。ヴァルマンが、リスクを考えずにこれらの手紙を渡したことに、驚きます。

舞台での初日から数日後に書かれた、最初に引用した1955年10月29日の手紙から、シムノンが大喜びだと伺えます：舞台は成功し、彼が夢見ていた脚色家が見つかったのです。

普段は脚色家には寡黙な彼が、この実り多いコラボレーション（ヴァルマンに77500フラン、彼にはそれ以上の額をもたらすのですから）を継続させるため、他の2作品を提案しているのです。デビューしたての作家なら誰でも、名声と経済的なゆとりをもたらすこの機会に飛び付くことでしょう。

唯一、自身の価値に確信がある作家のみ（1950年から1955年の間に、ダールはこのような作家になっていました）、この申し出を断り、シムノンに彼が最高の脚色家だという証拠を見せつけておきながら、コラボレーションに終止を打つことが出来るのです！この脚色家は、小説家と**対等**に取引し、今度は彼の条件を受け入れさせるのです：文学誌"Les Œuvres libres"『レ・ズーヴル・リーブル』の第114号（1955年11月発行）に『自由酒場』の脚本が発表された際に、フレデリック・ヴァルマンの以下の著作権が記載されていました。

「著作権：フレデリック・ヴァルマン、1955年
ロシアを含む世界中での複写、翻訳、翻案の権利を含む」

これは『雪は汚れていた』のために受けた侮辱のおとしませを付けるためだったの
でしょう。ダールに違いありません！

この入念に作り上げた演出のおかげで、フレデリック・ダールは、彼の文学界の「父」、彼の昔の崇拜対象を栄光の座から引きずり下し、後を継いだのです。アンソニー・バージェスのような批評家は、シムノンに関する記事の中で、この系列/解放の例を明るみに出しています：「サン・アントニオ、フレデリック・ダール、誰もが認める（シムノンの）後継者は、きっと彼よりも尊敬されるべき人間で、彼よりもオリジナルな推理小説作家でしょう。」（"Hommage à Qwert Yuiop" 『クウォーター・ユイオップへのオマージュ』、グラセ出版、パリ、1988年）

私には、絵画においてピカソとマチスの才能を比べられないように、20世紀のフランス文学界のこの二人の偉人の価値を比べることはとても出来ないのです、これはバージェス個人の見解としましょう。

その後何が起こったのでしょうか？ ダールは、二人の作家の間で行われた勝負の結果について語る必要はないと考えたようです。彼が言い負かし、『メグレ』はそれ以降舞台化されませんでした。シムノンは、彼より強い相手に出会ってしまったのです……

ダールはといえば、彼の策略の効果を実際に試したところです。舞台関係者の力を借りてシムノンに一杯くわせて幸福感に酔いしれ、仕事を絶対に無駄にしない彼の習慣通り、有名な作家の小説を多数脚色するという策略の続きを、若いヴァルマンに担わせるのです。

彼自身、"Pas d'orchidées pour Miss Blendish"（『ミス・ブランディッシの蘭』）の脚色を、あるエリアヌ・シャルル（あるフレデリック・シャルルの姉か妹でしょう）とマルセル・デュアメルと共同執筆し、私たちが一緒に見て来た、トラブル付きの『雪は汚れていた』の脚色を行ってデビューしたのです。

ダールは、この試行錯誤の経験を基に、フレデリック・ヴァルマンに、どんな作品も扱う脚色家の役を託し、軌道を修正しようとするのです。

そして、このまやかしの遊びは、ダールが再び自分の役を果たすと決めるまで、舞台、小説だけではなく、映画とテレビでも続くのです。

フレデリック・ダールに興味のある方や、彼を尊敬している方にとって、彼が自分の名前で発表したがらなかったこれらの作品を発見することは、嬉しい驚き、かつ悦楽の源です。フレデリック・ダールが我々に隠した作品がまだ残っていることでしょう……

ティエリー・カゾン
(小林恵訳)